

# 故 高窪 統教授を悼む (弔辞)

高窪先生、私が先生と親しく接する機会を得たのは、理工学部長になって最初の一年間、先生が電気電子情報通信工学科の主任教授として、理工学部の運営と一緒に携わってくださったときです。第一印象は、理工学部に、なんと立ち居振る舞い、姿勢が、品の良い方がいるのであろうということでありました。そして、一年の間に、それが高窪先生ご自身の生き方、考え方がそのまま現れているものであることが分かりました。会議では、物静かに常に人の話に耳を傾けておられ、判断が求められる場面では、御自分の学科に偏ることなく、全体を見通した公平な意見を述べられました。そして、会議でひとつの方向が示されると、それに沿って、学科の議論をきちんとまとめてくれました。もともと若い教授でありながら、実に誠実に信頼できる同僚でした。

しかし、私には、このような仕事のことよりも、むしろ会議の後に、学生と研究する話を楽しそうなさっていたこと、お子様のことを慈しむように話されていたことが強く印象に残っています。本当に勉強を愛し、まわりの人を愛することが出来る方だったと思います。

学生の教育にも非常に熱心に取り組まれ、しっかりとした見識をお持ちでした。お書きになったものの中に「習う、教える」だけでなく「任す、期待する」を重視して、能動的な人材を育てるべきであるという記述があります。これには、自分自身が研究教育に向かう真摯な姿勢を示す必要があります。そのことを本学の教員になられてから十年あまりの間、ずっと実践されて、多くの優秀な人材を育ててくれました。先生の研究者としての業績はもろろんのこと、

教育者としてのお姿は、同僚である私たち、また、指導を受けた学生諸君の心に深く刻まれています。

研究に対しても、教育に対しても、これから成し遂げようとする多くの夢をお持ちであったに違いありません。また、大学の中でも、学問の世界でも、先生に対して、大きな期待がありました。それが、このような形で半ばにして絶たれてしまったことは大変に残念であり、悔しくなりません。

残された私たちは、大学を運営していかねばなりません。先生の教えの通りに、高窪研究室の学生諸君は研究室の中の人間関係の中で支え合って、当初の衝撃から立ち直りつつあります。また、学科の学生諸君も、教員職員の支援のもとで、平静をとりもどしつつあります。

私たちには、大学の「社会に開かれた学びの場、情報交流・情報発信の場」という社会的な役割を果たし、同時に、学生・教職員をはじめ、キャンパスに集う人々の最大限の安全を守るという使命を遂行することが求められています。この難しい課題に、全力を挙げ、取り組み、安全に安心して研究教育をおこなうことができるキャンパスの実現についてさらに検討を深めてまいります。どうか、私たちの努力を見守っていただきます。

平成二十一年二月二十七日

中央大学理工学部長

田口 東